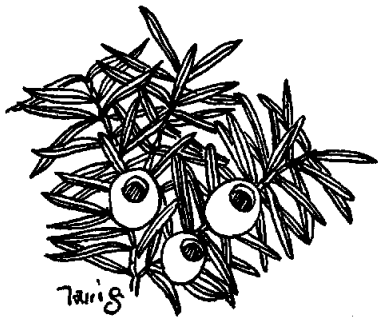

一　原　有　徳

日高の五葉松

焚火を前の夕どき、ふと見たテントポールの木の葉が五葉松であった。「君らはひどいことをする」と思い、立ちあがった私であったが、付近はほとんどが五葉松、左岸に亭々と聳える尾根筋一帯は、すべて五葉松であった。夕靄のなかの五葉松の純林は、墨絵のように美しかった。ここは日高国元浦川上流ニシュオマナイ沢、昭和三十八年七月、山へいった息子を急用でつれもどしにいったときのことである。

荻伏からトラックをかり、三六キロ奥まで走らせ、そこから樹木の混んだ暗い歩道を分け、地図上ピリガイ屋根九二〇真南の二股から川を溯行した。そうして標高三六〇の合流点に、彼らのテントを発見したのである。一日余裕があり、翌日この支流を越え、ペッピリガイからメナシベツ川を下った。

それから六年目(四十四年)の同じ七月、ソエマツ沢で遭難したN氏の追悼登山に参加し、ふたたび元浦川に入った。小樽から車を飛ばした。車道は中ノ岳分岐の二股までものびていてそこでキャンプした。

あの見事な五葉松の純林は、あとかたなく、そのあたりに営林署の建物があった。深い草をかいくぐって越えたペッピリガイへの沢一帯の山肌は裸山となり、植林のあとが縞模様をつくっていた。翌日、神威岳にのぼるときもずっと林相に気をつけたが、椴松に混じって幾本かの五葉松を見たにすぎない。あの見事な純林は見られなかった。

それからもう一つペッピリガイ沢を下るとき、残雪かと見間違うほどの大きな白のライラックがあった。あれもメナシベツ川からのびて来た車道工事に伐られたのではあるまいか?。これらは、専門的には問題外のことなのだろうか?

知床の道

『羅臼湖』の水ぎわを回って源八沢へ出た。偃松と丈なす笹をかきわけてコース係のKさんがすすむ。赤や黄のビニールテープが、要所の木枝に巻きつけてある。Kさんはいう。

「このへん何回来ても、とまどいます。笹を刈らしてくれないンですョ」

「このテープも、帰りには後続の者がとってくることになっています。これも条件で、このコースの許可がおりたンです」

広い草地から、岳樺と岩が混みあった狭い陰気な沢をくぐり稜線に出ると、偃松を刈りこんだ道らしきものがある。切口は古い。

「××大学ワンゲル部が××年前につけたコースです」

知西別岳西面は急に落ち、背稜山脈は曲折しつつ、崖をもつ特異な風貌の遠音別岳へとつづいている。稜線の左右は濃き樹海におおわれている。その上を揚羽蝶が一羽、日を受けて飛んでいった。

日本山岳協会十一回大会が知床であったのは四十二年八月のことである。そのときの日記の抜き書きである。この大会が開かれるまでには営林署や国立公園関係者はもとより、ついには協会のT会長までが反対されたということで、かなりの困難があったことを聞かされた。

私はその前年に、コース視察の山行に参加した。あいにくの降雨で、予定変更し、かつて軍用道路であって羅臼から遠音別への横断道路を歩いた。このときも道岳連の会長と理事長は南から北へ、車で関係役所の高官説得に苦労されていた。

峠に近い羅臼湖分岐点付近の矮小な蝦夷松の群生、尾根の端から沢筋へのステップ状にかかる小瀑、箱庭的な美しさが印象にのこっている。ところが、遠音別近くになると、径五〜六〇センチもある針葉樹が累々と倒され、大型ブルドーザーがうなりをたてて作業していた。聞くと、やがてあの箱庭風景の峠を越えて羅臼へ出る車道工事

盗伐をしたり、焚火や架橋のために大木を伐り倒した前科のある私がいうことは、盗人三分の理かもしれない。アウトサイダーとして、チャップリンのベルドー氏（殺人狂時代の主人公）的な意義があれば幸いである。

山のベルドー氏

だという。

「こんなことをゆるして、コースの笹や偃松を伐ったことがいけないンですか」

「話はつけたんですが、現地との連絡がわるかったンです。もつれてしまって…」

「役人への仁義がわるかったンだナ、大雪の大会には、はじめから役をつけてたいものネ」

「はじめは笹一本も手をつけてはダメだというンですヨ」

「T会長も大変な怒りようだということです」

「T先生は植物学者だから、標本採集だってやるでしょう。それはいいのかナ」

「本質的な問題からはみ出してるンだナ」

こんな会話が広い車道を四〜五人、横隊に歩きながらかわされていた。

翌年の大会では、知西別をのぼって、西側から羅臼岳をのぼった。沢筋にコースをとり樹木の損傷に気を配っていること、問題にされた一〇〇メートルくらいの偃松の伐られたところも通ったが、登山者のためにこれはゆるされないのか、横断道路のほか北岸に添い延々と原始林の中にオレンジ色鮮かにつけられた車道はなんの問題もないのか、知床五湖のほとりにジュース缶やチョコレートの包紙がちらばるのは訪れる人のモラルがわるく、観光業者やこれを許可した役所はなんでもないということなのか？歩きながら、ただ腹立たしかった。

知床が秘境といわれるのは、横断道路以南の半島基部である。樹海の上を飛んでいった揚羽蝶の映像が、いまも私の瞼に鮮明である。ここだけは、登山者に制限を加えたように、伐採ほか一さい厳しい規制がのぞみたい。

盗伐時代

終戦の冬は食料難に加え、薪炭不足にも悩まされた。ようやく手に入れた粉炭は、ベントナイトを混合しなければ燃えなかった。私は毎日、朝早くスキーをはいて、近くの落葉松林の下枝をとりにいった。

翌年雪が融けると、つぎの冬に備え薪集めに狂奔した。家から三キロ、望洋山の麓に一反歩ほどの畠を耕し、馬鈴薯と大根を作るかたわら、付近の落葉松林の切株を挽いて運んだ。私のほかにもいたので、切株はすぐになくなった。それからは接続する望洋山の斜面へいった。そこには楢、いたや、白樺など、ひときわ太いのがあった。

望洋山には朝に夕に、次第に人が増え、いつしか公然と立木を倒すようになった。だが、そのころは盗伐などとは誰も思わなかった。近所の人、隣り町の人、学校の先生に床屋の主人、××の爺さんに××のおかみさん、さらには職場の顔も見え、競うようにまた励ましあうように作業していた。大方は、コブのある根元をさけ、挽きやすく運びやすい幹の一〜二メートルのところをあさっていた。

私の父は鋸の目立てがうまく、私は軍隊仕込みの樵の腕ではかどった。私らは切株ばかりを集めた。それは燃え出があり、一と挽きで足りる。重くとも、畑地の横に積んで乾燥、秋に家へ運ぶという寸法であった。

夏も終わりになった朝まだき役人が大勢監視に来た。望洋山は国有林だったのだ。しかしこの日、私は畠仕事に従事し、他の人たちは誰も姿を見せず、つかまらなかった。前日に、道でこのことを知らせた者がいたからだ。以来、望洋山の木はとれなくなったが、翌年は大型トラック四台で、質のいい安い薪をたくさん供給する者がいて市民の多くがこの恩恵に浴した。

あれから二十数年、望洋山には切株からのびた幹が、結構もとの太さになっているし、伐られなかった木が半ば朽木となっていたりする。後日聞いた話だが、盗伐監視を知らせた人、大型トラックで薪を供給した人は、ともに役所の事情に通じた者で、トラックの薪もじつは大がかりの盗伐によるものだった。

（小樽山岳会々員）